慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジェイムズ・ボールドウィン基礎研究 : 伝記2
Sub Title	James Baldwin : a critical biography 2
Author	辻, 秀雄(Tsuji, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Keio University Hiyoshi review of English studies). No.77 (2023. 3) ,p.31- 49
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20230331-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジェイムズ・ボールドウィン基礎研究
——伝記 2

辻　　秀　雄

本プロジェクトは，アフリカ系アメリカ人作家ジェイムズ・ボールドウィン（James Baldwin）を主題としたモノグラム執筆を準備する基礎研究である。同書は，作家の紹介ののち，続く各章で長編を一本ずつ論じていく構成をとる。その作家紹介部にあたる伝記研究を成すのが本稿である。

伝記 2 が扱う「パリ時代」は，第一長編 *Go Tell It on the Mountain*（1953）と第二長編 *Giovanni's Room*（1956）の出版を含み，いよいよボールドウィンが本格的に作家生活へ没入していく時期にあたる。このあとには，「公民権運動時代」，「南仏時代」が続く。作家にかかわる基礎事項を時系列に沿ってまとめながら，なるべくボールドウィンのエッセイを紹介できるよう心がけた。

パリ時代（1948–1957 年）

つらいグレニッチビレッジ（Greenwich Village）時代に続くパリ（Paris）時代は，ボールドウィンが小説家としての才能を開花させた時期であると言える。その幸先を暗示するようなある出来事が，ボールドウィンの渡仏直前に起きた。1948 年 10 月，初めて短編が出版されたのである。*Com-*

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

mentary 誌に，後に短編集 *Going to Meet the Man*（1965）に収録されることになる“Previous Condition”が掲載される（Campbell 41）。

“Previous Condition”は，ボールドウィンのグレニッチビレッジ時代を彷彿とさせる内容となっており，瞥見する価値がある。同短編は，ピーター（Peter）と名付けられた役者のアフリカ系アメリカ人青年を主人公とする。16 歳のときにニュージャージー（New Jersey）の実家を飛び出し，国中を放浪した経験を持つピーターは，現在ニューヨーク市（New York City）に戻ってきている。ユダヤ系の友人ジュールズ（Jules）に頼んでダウンタウンの簡易宿泊所に部屋を借りてもらって数日暮らすが，予期していたとおり他の宿泊客に見つかり，大家に追い出される。その晩，デート相手の既婚のアイルランド系の白人女性アイダ（Ida）と夕食をともにするが，口論となる。ジュールズもアイダも同情的であるが，ピーターには彼らが自分の境遇を理解しているとはどうしても思えないのである。店を出て一応の和解を経てアイダと別れ，ジュールズの家に行くと彼女に伝えるが，足が向いたのは，大家であった白人の老婆に言われた「あんたたちの居場所の［マンハッタンの］上のほう」（*Going* 91），すなわち Harlem（ハーレム）であった。バーに入って隣に座る女性たちと会話を交わす。最初邪険に扱った年配の女性に，ビールをおごる。“Baby, . . . what’s your story?”と彼女に水を向けられるも，“I got no story, Ma”と彼は答える（100）。

ボールドウィンは生まれ育ったハーレムにあっても，そして家を飛び出して暮らしていたビレッジにあっても，自らの居場所を見出すことはできなかった。そうした心情が，この短編には描かれている。そうした価値はありながら，のちのボールドウィンの作品と比べると，この短編の未熟な側面が浮かび上がる。一つには，セクシュアリティの題材が巧妙に回避されていること。そしてまた，父との関係も主題化されることはない。

アイダはピーターよりも 5 歳年長の既婚女性で，バレーダンサーの夫は不在がちだという。ピーターが彼女と出会ったのは 1 年前のことで，「波風の立つ関係でありながら，離れることはなかった」と記述される二

人の関係は，性的なものであることが示唆されるものの，具体的には明らかにされない（*Going* 88）。アイダは，夫が公演旅行に恋人の青年たちを伴っているのではないかと疑っているが，ボールドウィン自身の，あるいはアイダにさして執着しているわけでもなさそうなピーターのセクシュアリティが，屈折してこの不在の夫に投影されているようだ（88）。アイダが多かれ少なかれ脱性化された印象を与えるのは，彼女を取り巻く男たちの性的指向ゆえという可能性が示唆される。いずれにせよ，ピーターとアイダの実際の関係，そして彼のセクシュアリティはあいまいなままに物語は幕を閉じる[1)]。

ピーターの父親についてはもっと露骨で，彼は物語に一切登場しない。「ぐうたらだった」と言及される父親に，ピーターは会ったことすらないという。けんかをして血を流して帰宅した幼いピーターにむかって母親は，「殺されたいのかい？　父さんのような最期を迎えたいのかい？」と問いただす（87）。ボールドウィン自身にとってもっとも困難かつ影響の深いものであったはずの父親との関係は，この短編において一顧だにされない。

その意味で，物語の最終部は皮肉な響きを持つ。ハーレムのバーにおいてすら自分が場違いであると感じるピーターは，和解の印として年配の女性にビールをおごる。しかし，それ以上に自らの物語を――あるいは自らの過去を――この女性に打ち明けようとはしない。そうしたピーターの孤独こそが本短編の主題なのであろうが，ピーター自身が自らの苦悩を言語化して他人と共有しようとしない姿は，そのままボールドウィンがぶつかっていた創作の壁を暗示するかのようである。

以上のような限界を突破して，パリでのボールドウィンは自身をより客観的に見つめていくようになる。それが，1953 年に出版される第一長編 *Go Tell It on the Mountain* の完成へとつながっていくのであるが，それも平坦な道のりではなかった。

ボールドウィンをパリで待ち受けていたのは，リチャード・ライト（Richard Wright）を筆頭に，ジャン＝ポール・サルトル（Jean-Paul Sartre），

マックス・エルンスト（Max Ernst），トルーマン・カポーティ（Truman Capote），スティーヴン・スペンダー（Stephen Spender），シモーヌ・ド・ボーヴォアール（Simone de Beauvoir）といったそうそうたる面々である（Leeming 68）。しかし，いまだ（長編小説を）未出版の作家であったボールドウィンは，同様の境遇の若手文学者たちと行動を共にしていく。そうした友人の一人がテミストクレス・ホエティス（Themistocles Hoetis）というアメリカ出身の若者であった[2)]。彼は，友人のエイサ・バンヴェニスト（Asa Benveniste）と *Zero* と名付けられた雑誌を創刊しようと計画していた。ホエティスらは，エッセイや短編が *Commentary* 誌などにすでに掲載されて名が知られ始めていたアフリカ系アメリカ人青年――すなわちボールドウィン――のパリ訪問を聞きつけ，自分たちの雑誌創刊の企画に参画させたいと考えた。ボールドウィン到着の日，二人はカフェ ドゥ マゴ（Deux Magots）でサルトルとライトと会っていたのだが，それとてこの大御所二人に *Zero* への参加を要請するためのことであった。バンヴェニストは，数人の仲間と連れ立って出向き，パリに到着したばかりのボールドウィンをそのままドゥ マゴへと連れ帰る。ボールドウィンはライトとの再会を果たし，そして同席のホエティスと出会う。これ以降，ボールドウィンはホエティスと親しく付き合い，*Zero* の創刊号（1949 年春号）にエッセイを寄稿する。

そのエッセイこそ“Everybody’s Protest Novel”であるが，このなかでボールドウィンは，ニューヨークでずいぶん世話になり，パリで再会した年長の作家，リチャード・ライトへの批判を展開する。エッセイ冒頭において槍玉に挙げられるのは，ボールドウィンが愛読したはずの本，*Uncle Tom’s Cabin*（1852）だ。ボールドウィンは，ハリエット・ビーチャー・ストウ（Harriet Beecher Stowe）が描く黒人が「大義への献身」に従属させられて，「ひとへの献身」から追究されてはいないと指摘する。すなわち，人間の持つ「法に規制されえない自由」あるいは，「あらかじめ計画されることはない達成」が，トムをはじめとするストウの小説の黒人登場人物

たちには付与されていないとする糾弾である（*Collected Essays* 12）。「断固として定義不能にして予想不可能な」人間を描くのが文学であり，それを怠れば単なる「パンフレット」に過ぎないと，ボールドウィンは言う（12–13）。その意味で，ライトの *Native Son*（1940）のビガー・トーマス（Bigger Thomas）は，ストウのトム（Tom）をちょうど反転させた登場人物である，とボールドウィンは筆を進める。トム同様にビガーは，「自分が人間以下の存在である可能性」を認めてしまっている。「耐え忍ぶ」トムとは対照的にビガーは「自らの人間性を求めて戦わなければならないと思いこんでいる」のであるが，むしろ人は人間性を求めて戦うのではなく，自らが生まれ持ったその人生を「受け容れる」べきであると，ボールドウィンは続ける。“The failure of the protest novel lies in its rejection of life, the human being, the denial of his beauty, dread, power, in its insistence that it is his categorization alone which is real and which cannot be transcended”と締めくくる（14, 18）。アフリカ系アメリカ文学の一つの伝統を切り拓いたライトに対する決別を宣言する“Everybody’s Protest Novel”は，またもう一つの「父殺し」にほかならなかった[3)]。

リチャード・ライトとは異なる道を模索していたパリ時代のボールドウィンが愛読した作家の一人が，ヘンリー・ジェイムズ（Henry James）であった。友人の勧めもあって真剣に読み始めたジェイムズに，ボールドウィンは新しいインスピレーションを得る（Leeming 61）。また，ボールドウィンは，フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー（Fyodor Mikhaylovich Dostoyevsky）も愛読したが，デヴィッド・リーミング（David Leeming）はこの両者の融合をボールドウィンのエッセイ，“Encounter on the Seine”にみる（63）。

リーミングが指摘するボールドウィンに対するヘンリー・ジェイムズの影響は，パリ時代のボールドウィンの成長に大きな役割を果たしたと考えられる。“Encounter on the Seine”においてボールドウィンが取り組み始めた題材は後のエッセイにおいて深められるが，そうした後続のエッセイ

の一つ，1959 年に出版されたエッセイ集 *Nobody Knows My Name*（1961）に収められた“The Discovery of What It Means to Be an American”は，まさしくその題「アメリカ人であることの意味の発見」において，ボールドウィンの関心事を雄弁に物語る。本エッセイの冒頭，ボールドウィンはヘンリー・ジェイムズの「アメリカ人であるというのは複雑な運命である」という言葉を引用することから論を起こす（*Collected Essays* 137）。ジェイムズがヨーロッパとの対比においてアメリカ人を探求した作家であることを思い起こせば，パリ生活によって同様の視座を得たボールドウィンが――かたやニューイングランド（New England）の有閑階級の名家の子息，かたやハーレムの貧乏な一家に育った私生児という，出自や人種における差異を乗り越えて――彼をモデルと見なしたことも不思議ではない。

1950 年に出版された“Encounter on the Seine”は，批評家ジェイムズ・ミラー（James Miller）がボールドウィンの“Paris essays”（51）と呼ぶ一連のアイデンティティ探求論考の嚆矢をなすが，後に続くのは，“Stranger in the Village”（1953），“A Question of Identity”（1954），“Equal in Paris”（1955），“Princes and Powers”（1956），“The Discovery of What It Means to Be an American”（1959），“The New Lost Generation”（1961）である。ミラーの見立てにおいて，これらパリ・エッセイ群は，押し付けられた黒人としての抑圧的なアイデンティティを捨て，アメリカ人としての新たなアイデンティティを探求したボールドウィンの成長の軌跡を示す。ボールドウィンは，白人を含むアメリカ人が過去から疎外された国民であることを見抜き，黒人たちの国家内における立場を改善することが，アメリカ人が被ってきた自他の両方にかかわる疎外を解消する助けになると説いたのである（51–53）。

自他の両方にかかわる白人アメリカ人の疎外とは，その歴史認識に由来する。奴隷制とそれに続くアフリカ系アメリカ人たちに対する抑圧の歴史を直視しない白人たちは，そのようにして自らのルーツをも喪失してしまったということである。“Encounter on the Seine”でボールドウィンは，

「自身と同邦人から底知れないほどに疎外されてしまっている状況こそ，アメリカ的経験である」と書くが，それは，白人たちが歴史から目をそらしてきたことに対する糾弾であると考えられる（*Collected Essays* 89）。しかし，この批判は憐みをも含む。アフリカ系アメリカ人からしてみれば，「自身，そして同邦人や自らの過去から完全に疎外された」状況を生みだしたのは，奴隷貿易が可能にした奴隷制とそれに続く人種差別社会を作り上げた白人たちにほかならない。ボールドウィンはそうした自身の疎外された状況を，パリで出会ったアフリカ人たちとの差異から痛切に感じる。パリのアフリカ人たちは，「直毛と白い肌を許容可能な唯一の美とすることを表明する文化に受け入れられようと，生涯にわたって心を痛めることはない」からである（89）。アフリカ人とアフリカ系アメリカ人の間に横たわる「300 年以上に及ぶ溝」としてのこの「疎外」は，白人アメリカ人とアフリカ系アメリカ人の間にある分断を超えたところでの両者の近しさを皮肉にも照らし出すのである。すなわち，「黒人たちは，白人アメリカ人のうちに，自らの不安，恐怖，やさしさが映し出されている――いってみれば一段高い音調で反復されている――のを見出す」（89）。白人アメリカ人とアフリカ系アメリカ人の運命は分かつことができず重なりあってきたのであり，両者は「愛し，憎しみ，執着し，恐れあってきた」関係なのである（89）。人種的他者としてアメリカ社会において疎外されてきたアフリカ系アメリカ人の立場を，主流の白人アメリカ人の精神構造に反転させてアメリカ的経験として意義付けるこの発想の転換は，ボールドウィン文学が問いただしていく人種関係の起点となるものと評価できる。

このように母国の状況を客観的に見つめ直す視座を得た異国の地パリにおけるこの時期の出会いは，生涯にわたってボールドウィンに影響を与えることになる。パリ時代に彼が付き合っていたのは大半が白人であったが，そうした相手の一人がルシアン・ハッパースバーガー（Lucien Happersberger）という当時 17 歳のスイス出身の青年である。ボールドウィンが彼と出会ったのは 1949 年の暮れから 50 年の年初にかけて，場所はレーヌブ

ランシュ（La Reine Blanche）という名前のパリのバーであった。時には恋人として，しかし大部分においては兄弟のようにして，あるいはビジネスパートナーとして二人は以降 40 年にわたって関係を続けることになる。ルシアンはバイセクシュアルで恋人関係に執着せず，ボールドウィンとの出会いの二年後，ある女性と結婚することとなる。それは，その女性が妊娠したことを知ったボールドウィンにせかされてのことであった（Leeming 74–77; Campbell 60–61）。しかし，その結婚も長続きすることはなかった。

もう一つのほぼ生涯にわたる付き合いとなる出会いもこの時期にあった。ボールドウィンは，アメリカ大使館付きの経済学者であったメアリー・ペインター（Mary Painter）と 1950 年の 4 月に出会う。自身の同性愛を完全に自覚するにいたっていたボールドウィンは，以前のように女性との恋愛関係を持つことはなかったが，二人は友人として晩年まで長く付き合っていく（Leeming 77）。

この二人のうちの前者，ルシアンが，ボールドウィンの初長編，*Go Tell It on the Mountain*（1953）完成に果たした役割は小さくない。ルシアンは，執筆に行き詰まって精神的に参っていたボールドウィンを落ち着かせるために，実家が所有する山荘へ彼を連れていくことにしたのである。しかも，自身の結核治療のためであると偽って，親から送金までしてもらう。このお金を使って，二人はスイスの山間の村，ロイカーバート（Leukerbad; Loèche-les-Bains）で 1951 年から 52 年にかけての冬の 3 か月間を過ごす。ボールドウィンにとって，ロイカーバートでのルシアンとの共同生活は，「愛する人との家庭生活という夢」に最も近づいた時間でもあった（Leeming 78–79）。

この温泉リゾートでの滞在の様子の一端は，ボールドウィンのエッセイ，“Stranger in the Village”（1953）にてうかがうことができる。村人たちはアフリカ系の人々を一度も見たことがなく，「生きる驚異」としてのボールドウィンに屈託なく接する（*Collected Essays* 117, 119）。町を歩く彼を見て，子供たちは何ら悪意なくドイツ語で“*Neger! Neger!*”と叫ぶのだが，

ボールドウィンにしてみれば，この語の響きがもたらす母国での嫌な過去を思い出さずにはいられない。そのアメリカ白人と比較するに，スイスの村人たちの「無邪気さ（innocence）」は，前者が決して持ちえないものだ（118–19, 129）。「白人たちが私のことを馴染みない存在（stranger）と見なすことが許される贅沢がいまだあるこのヨーロッパの村の素朴さに，アメリカ人たちが後戻りすることができる道はいかようにもありはしない」のである（129）。というのも，「現在生きているアメリカ人にとって，私はもはや馴染みない存在でいることはできない。アメリカ人たちを世界のほかの人々と分かつ物事の一つは，彼らほどに黒人の人生に深く関与してしまっている人々はいないし，黒人たちがその人生に深く関与してしまっているということでもまた，同様である」からだ（129）。白人アメリカ人たちとアフリカ系アメリカ人の生が互いに深く入り組んでいるとする認識が，ここでもはっきりと打ち出される。

“Stranger in the Village”は，白人アメリカ人とアフリカ系アメリカ人の関係をめぐって“Encounter on the Seine”が示した洞察を深めているが，過去についての認識においても，新たな視座が見出される。ボールドウィンは，歴史は悪夢であると表現したジェイムズ・ジョイス（James Joyce）の言葉（『ユリシーズ』［*Ulysses*］1922）を引きながら，次のように続ける――「人々は歴史のうちに捕らわれ，そして歴史は人々のうちに捕らわれている」（119）。一見ありきたりな主客入れ替えの文章であるが，*Go Tell It on the Mountain* 執筆が佳境に入ってきた時期にもたらされた明察として見過ごすことはできない。本小説が各登場人物たちの過去を掘り下げ，そして歴史を白日の下にさらす試みにおいて成り立っているからである。そのようにして個々人は歴史から解放されると同時に，歴史もまた個々人から解放される――そのことを，*Go Tell It on the Mountain* は物語る。

ボールドウィンは，「2 枚のベシー・スミスのレコードとタイプライターで武装して」やってきたスイスの村で，どうにか *Go Tell It on the*

Mountain を完成させる（“The Discovery of What It Means to Be an American”; *Collected Essays* 138）。先述の“The Discovery of What It Means to Be an American”において，ボールドウィンはこの村での執筆を振り返って以下のように書く――「私は子供のころに知っていた，そして以来長年にわたってずっと逃げ出していた日々を再創造しようと試みていた」（138）。すなわち，*Go Tell It on the Mountain* 完成は自らの過去に向き合う作業抜きには達成されえなかったのである。その際，アフリカ系アメリカ人女性ブルース歌手，ベシー・スミス（Bessie Smith）の音楽が助けになったと彼は続ける。

> It was Bessie Smith, through her tone and her cadence, who helped me to dig back to the way I myself must have spoken when I was a pickaninny, and to remember the things I had heard and seen and felt. I had buried them very deep. I had never listened to Bessie Smith in America (in the same way that, for years, I would not touch watermelon), but in Europe she helped to reconcile me to being a “nigger.”（138）

ボールドウィンはここで人種に焦点を当てているが，本小説はむしろ，そのような集団的アイデンティティ以上に個人のアイデンティティを探求していることに注意する必要がある。しかし，そのようなより個人的な側面において自身の来歴を掘り下げるためには，まずは人種アイデンティを受け入れる必要があったということもまた，この引用は強く訴えかける。こうしてボールドウィンは，ついに執筆を阻んでいた壁を乗り越えた。1952 年 2 月 26 日，ボールドウィンはルシアンと連れ立って麓の町の郵便局へ向かい，ニューヨークのエージェント，ヘレン・ストラウス（Helen Straus）へ原稿を送った（Leeming 79; Campbell 75; Eckman 125）。少なくとも 8 年にわたって取り組んできた第一長編を，ついに脱稿したのである。

数か月後，クノップ社（Knopf）が出版に興味を示し，ボールドウィン

は帰国を決意する。偶然パリに立ち寄った旧知のマーロン・ブランド（Marlon Brando）から旅費を借り，4 月，海路にてニューヨークへむかう。船上ではディジー・ガレスピー（Dizzy Gillespie）に会い，ジャズについていろいろと教えてもらったという。この 1952 年の帰郷の間ボールドウィンは家族との絆を再確認するが，特に弟デヴィッド（David）との関係が深まったことは，ボールドウィンののちの人生の航路を決定づけた。一夏を家族との時間，旧友との再会，そして *Go Tell It on the Mountain* の改稿に費やし，出版の目途を立て，彼はパリに戻る。直後，ルシアンとその新妻をスイスにたずねるが，ボールドウィン自身とルシアンが同性愛関係にあったこともあり，気まずい空気が支配した。そんななか，ボールドウィンは新たな創作活動に打ち込む。ニューヨーク帰郷中に手をつけた戯曲執筆を進めたのである。*The Amen Corner* と名付けられた同作は，1955 年 5 月に初演されることとなる（Leeming 79–83）。

ボールドウィンは，第一長編完成にあぐらをかくことなく，創作活動に一層のめりこんでいった。1953 年 5 月の *Go Tell It on the Mountain* の出版を皮切りに，55 年 5 月には名門黒人大学，ハワード大学（Howard）での *The Amen Corner* 上演，そして同年暮れには第一エッセイ集 *Notes of a Native Son* 出版と立て続けに作品を世に問うて文筆家として頭角を現していく。しかも，1953 年には第二長編 *Giovanni's Room* の執筆を開始し，1955 年には草稿を完成させて出版社への打診を行っている。ボールドウィンは人々の関心を集め，支援も受けられるようになった。1954 年にはグッゲンハイム（Guggenheim）のフェローシップを受け，また 56 年には National Institute of Arts and Letters の賞を授与され，さらに *Partisan Review* のフェローシップも受け取ったのである（Leeming 97, 118）。

こうしたなか，ボールドウィンが身を置く環境が変化していく。グレニッチビレッジ時代の恩人にして恩師，画家のビューフォード・ディレイニー（Beauford Delaney）がフランスへ移り住み，パリ郊外のクラマール（Clamart）に落ち着いた（Leeming 93–94）。ボールドウィンはしばしば彼の

もとを訪れたが，かたや新しい種類の人々との付き合いも始まった。先の1952年の帰国の際には，同年に出版された『見えない人間』（*Invisible Man*）によって一躍名をとどろかせることになるラルフ・エリソン（Ralph Ellison）にも会っていたのだが（Leeming 94），今や自身長編小説の出版を果たし，名実ともに小説家となったボールドウィンは，同業者と知り合う機会も増えていった。その面々には，ジェイムズ・ジョーンズ（James Jones），フィリップ・ロス（Philip Roth），ウィリアム・スタイロン（William Styron），ノーマン・メイラー（Norman Mailer）といった著名な同時代のアメリカ人作家たちが含まれる（Eckman 124）。また，文化人とも親交を結んでいく。アフリカ系アメリカ人ダンサーのバーナード・ハッセル（Bernard Hassell）や，マヤ・アンジェロー（Maya Angelou）である（Leeming 92–93）。

この時期以降のボールドウィンの生活を特徴づける，頻繁な移動も始まった。パリに戻ってから，たびたびスイスのロイカーバートを訪れたほか，1953年秋にはスペイン（Spain）へ旅行をしている。そんななか執筆を続けるのであるが，それなりに名を成し，多少なりとも金銭的な余裕が生まれたボールドウィンのもとには，人々が集まってくるようになった（Leeming 90）。そうした理由もあってパリを離れようとしたボールドウィンは，一時期シャルトル（Chartres）近郊の町，ガラルドン（Gallardon）に住んだほか，南仏グラース（Grasse）の小さな町，レ・キャトル・シュマン（Les Quatre Chemins）に当時のフランス人の恋人と滞在している（Eckman 128, 132）。南仏で過ごした1953–54年にかけての冬の間に *Giovanni's Room* 執筆が大きく前進することになったが，同書が部分的に南仏の地を舞台にしていることにこうした背景が反映されている。

ヨーロッパ内での移動にとどまらず，大西洋をまたぐ移動もまた活発化していく。後にボールドウィンは，自嘲気味に自らを「大西洋をまたにかけて通勤する者（transatlantic commuter）」と呼び表すにいたる（qtd. in Campbell 152）。1954年夏，ボールドウィンは二度目の帰国を果たすのだが，このときは前回よりも長く1年ほどの滞在となった。しかし，この滞在期

間中も彼は休むことなく移動を積み重ねていく。たとえば，8 月にはニューハンプシャー（New Hampshire）のマクダウェル・コロニー（MacDowell Colony）に滞在し，またそのあとにはニューヨーク州サラトガ・スプリングス（Saratoga Springs, New York）にある芸術家向け施設，ヤドー（Yaddo）にも逗留している（Leeming 98–99）。12 月には，帰国前のパリで再会して相談していたとおり，ルシアンが空路でニューヨークを訪れる。ボールドウィンは空港に彼を迎えに行ったが，このときの体験は第三長編 *Another Country*（1962）の結末部において使われることになる（Leeming 99）。ボールドウィンはまた，*The Amen Corner* がハワード大学で公演されることになる知らせを受け，同大学所在の首都ワシントン（Washington D.C.）へ赴き，リハーサルに参加して戯曲の改稿を行ったのち上演を見届けている。この際には，同大の学生だったリロイ・ジョーンズ（LeRoi Jones；のちのアミリ・バラカ［Amiri Baraka］），そして教授たち――具体的には，社会学者のフランクリン・フレーザー（Franklin Frazer），詩人そして文芸批評家のスターリン・ブラウン（Sterling Brown）ら――と親交を持った（Leeming 110–11）。

生産的な期間となったこのアメリカ滞在中，かわらない人種差別を痛感する出来事も起きた。帰国直後のある深夜，マンハッタン（Manhattan）のダウンタウンをパリで知り合った友人，テミストクレス・ホエティスと歩いていたボールドウィンは，どこかのレストランかバーでひと騒ぎ起こしたらしい若者たちと一緒に警察に逮捕されたのである。二人はそのまま投獄されて一夜を過ごした。誤認逮捕は明白であったが，自分が黒人であるから逮捕されたのだとボールドウィンは叫び続けて，白人のホエティスを不安にさせた（Campbell 91）。翌朝彼は執行猶予判決を受け，釈放されたものの，この体験はボールドウィンにパリでの苦い思い出を呼び覚ましたことだろう。エッセイ，“Equal in Paris”において半ばユーモラスに回想される投獄事件は，ボールドウィンがパリに到着して 1 年ほどたった 12 月に起きた。当時パリでホテル住まいをしていたボールドウィンは，あるアメリカ人観光客と知り合ったのだが，その友人がホテルから無断で持ち

出したシーツがボールドウィンの部屋で発見されるにいたり，窃盗の罪を問われたのだ。結果としてボールドウィンは，クリスマスを挟む 8 日間をフランスの牢獄で過ごす羽目となる。結局彼は無罪放免となるのだが，異国の地での，いつ終わるとも分からない投獄の不安は，彼の心に深い傷を残した。その後も，ボールドウィン自身が投獄の対象とならずとも，仲間や知り合いが収監されるということは次々に起きていく。たとえば，後の 1968 年，一時期ボールドウィンのアシスタントのような役割を果たしていたトニー・メイナード（Tony Maynard）が殺人容疑で逮捕された時には，彼が逮捕されたドイツにまで赴くのに続けて，数年にわたってこの事件に関わっている（Leeming 289–90）。ほかにも，半ば政治犯のようにして投獄された著名人の知り合いたち――アンジェラ・デーヴィス（Angela Davis），ヒューイ・ニュートン（Huey Newton）ら――との関係もあり，こうした一連の，特にアフリカ系アメリカ人がかかわる収監は，ボールドウィンにとって大きな問題であり続けた。それは，1974 年に出版される，*If Beale Street Could Talk* にまで連なる問題意識である [4)]。

その意味で，一夜の投獄ですらボールドウィンに浅からぬ文学的影響を残したと言えなくもないこの二度目の帰国は，1955 年秋に切り上げられる。パリに戻るボールドウィンは，ミュージシャンの恋人，アーノルド（Arnold）を伴っていた。アーノルドはもともとルシアンがニューヨークで作った知り合いであったが，むしろボールドウィンとの関係が発展し，ワシントン DC にも同伴している。残念ながら，ルシアン同様，アーノルドはボールドウィンが夢見る「家庭的な恋人」からは程遠かったこともあり（Leeming 113），およそ 1 年後に二人の恋愛関係は終わる（Leeming 130）。

しかし，伝記作者たちは，ボールドウィン文学におけるこのアーノルドの痕跡を指摘してきた。*The Amen Corner* 上演のためにワシントン DC に滞在していたころ，ボールドウィンは新しい短編小説に取り掛かっていた。1957 年夏に *Partisan Review* に発表されることになる傑作短編，“Sonny’s Blues”である。その名が題名に冠された登場人物のサニーはジャズ・ピ

アニストなのだが，その人物造形には，ミュージシャンであったアーノルドの姿が重ねられているのである（Leeming 111）。さらに，エド・パヴリック（Ed Pavlić）が書くように，アーノルドがドラマー，パーカッショニストであったというのであれば（182），彼の影響は *Another Country*（1962）の主要登場人物ルーファス・スコット（Rufus Scott）にも認められるかもしれない。事実，ボールドウィンが *Another Country* に本格的に取り組み始めるのは，彼がアーノルドを伴ってパリに戻った時期，あるいは二人が別離を決意するコルシカ島（Corsica）での滞在の時期であったと指摘されている（Leeming 118; Campbell 111）。

Another Country に取り組みながら，ボールドウィンの心は再びアメリカへと引き戻されていた。もちろん本小説の大部分がニューヨークシティを舞台にしているということもあるが，フランスでの生活を続けていたボールドウィンにとって母国での社会変動が看過できない勢いを得ていたのが，1950 年代半ばなのである。とは言っても，そうした趨勢は，先の二度目の帰国の際にはすでに明らかになっていた。前述のように，ボールドウィンは 1954 年夏，具体的には 6 月初旬にニューヨークへ帰着した（Leeming 98）。そのわずか数週間前に，ある歴史的な判決が下されている。5 月 17 日に米国連邦最高裁判所が出した，ブラウン対教育委員会判決である。公共教育の場における人種隔離を違憲としたこの判決によって，19 世紀終わりから米国社会が黙認してきた「分離すれども平等」という事実上の人種隔離制度が打ち砕かれるきっかけが作られたのである。しかし，ファーン・マージャ・エックマン（Fern Marja Eckman）ら伝記作者たちが指摘するように，ボールドウィンはすぐにはエッセイ等においてこの判決に言及していない（134; Campbell 90）。しかし 1957 年以降，ボールドウィンは，公民権運動に積極的に関与していく。この小さからぬ変化の一端は，ワシントン DC での滞在にあるようだ。リーミングによれば，彼の地でボールドウィンは，北部出身のアフリカ系アメリカ人にワシントン DC の問題などわかりっこないし，ましてや南部のことがわかるわけはな

い，という辛辣な意見をハワード大学の関係者から浴びせられた。スターリン・ブラウンは，ボールドウィンを慰めると同時に，南部を訪問することの重要性を説いたという。ブラウンはさらに，公民権運動を理解することにおいても，南部訪問が不可欠であると伝えた。ボールドウィン自身にしても，継父は南部出身であり，彼の地に対する関心が深まっていった状況がうかがえる（Leeming 110–11, 118）。

そのような時期に書かれたのが，*Partisan Review* から執筆依頼を受けたエッセイ，“Faulkner and Desegregation”（*Partisan Review* 1956 年秋号に掲載）である。1956 年 3 月に雑誌 *The Reporter* に掲載された，イギリスのジャーナリスト，ラッセル・ハウ（Russell Howe）がウィリアム・フォークナー（William Faulkner）に行ったインタビューへのボールドウィンの反応が，このエッセイだ。フォークナーは，アフリカ系アメリカ人の権利獲得は当然のこととしながら，人種隔離を違憲と判断した最高裁の判決が南部社会に巻き起こした混乱を念頭に，「中道」の「リベラル」の立場から「ゆっくり進もう」と呼びかけたのである。こうした漸次変化を痛烈に批判したボールドウィンのエッセイは，フォークナー個人に対する攻撃であると同時に，南部社会に対する考察の機会ともなったとリーミングは指摘する（Leeming 118; Howe 18）。そもそもインタビューにおいて，フォークナー自身が，アフリカ系アメリカ人に対する貧乏な白人たちの嫌悪は，奴隷制に由来する南部の制度，体制を維持するために教え込まれたものであると述べているからだ（Howe 19–20）。社会システムと人種差別のつながりを指摘する本インタビューを読むことで，長い目では南部社会の改善を是としながらも南部社会側に身を置かざるを得ないフォークナーが，ボールドウィンに対して――すなわち差別され隔離され暴力を受けてきた側に立ち，もう我慢がならないとする立場に対して――授けた南部社会への洞察というものも，少なからずあったことが推察される。

人種と社会の関係についてボールドウィンが考察を深めることになったまた別の機会が，1956 年 9 月にもたらされた。雑誌に依頼され，ソルボ

ンヌ大学（Sorbonne）で開かれた第一回黒人作家・芸術家国際会議を取材することになったのである。その成果が，*Encounter* 誌 1957 年 1 月号に掲載され，のちにエッセイ集 *Nobody Knows My Name*（1961）に収められるエッセイ，“Princes and Powers”だ。ボールドウィンは 9 月 19 日から三日間にわたって開催された同会議をかなり詳しく報告している。セネガル（Senegal）出身の編集者アリウン・ジョップ（Alioune Diop），セネガル出身の詩人レオポルド・セダール・サンゴール（Leopold Sedar Senghor），マルティニク（Martinique）出身の詩人エメ・セゼール（Aimé Cesaire），リチャード・ライトといった主要人物の講演をときに引用しながら細かく紹介するとともに，自らの感想や反応を付していく。そのなかでも，西洋に抑圧された被植民者としての黒人たちが全く新しい文化を作っていくべきと説くセゼールの論調には，ボールドウィンはあまり賛同の意を表さない。セゼールのような人は「黒人の一人であることをやめることはないものの，しかしヨーロッパ的な権威をもって行動しているがゆえに」魅力的に映るのであり，セゼールの講演がそうした西洋的な影響についての考察に欠いているとボールドウィンは書く（157–58）。かたや，黒人のもっと微妙な立場を表明しようと取り組んでいるとボールドウィンが理解する，バルバドス（Barbados）出身の小説家・詩人，ジョージ・ラミング（George Lamming）の言葉に共感が示される。ボールドウィンは，ラミングが黒人たちが生きる“duality”を示唆していると理解する――“all Negroes were held in a state of supreme tension between the difficult, dangerous relationship in which they stood to the white world and the relationship, not a whit less painful or dangerous, in which they stood to each other”（161）。そのような，単純な人種間の二項対立だけではなく，その対立に重ねあわさって存在する，人種のカテゴリーの内部にある個々人間，あるいは個と人種集団の葛藤は，ボールドウィンが対峙してきた，そしてこれからも向き合っていかなくてはならない問題なのであった。

黒人作家・芸術家国際会議後の 10 月，前述のようにボールドウィンは

アーノルドとともにコルシカ島へと出発する。しかし，二人の関係には早くも暗雲が立ち込めていた。出発前のパリで，アーノルドとの関係に悩んでいたボールドウィンは，ある晩の喧嘩ののち，睡眠薬を過剰服用する。すぐに過ちに気づいたボールドウィンはメアリー・ペインターに助けを求め，睡眠薬を吐き出して事なきを得る（Leeming 119–20）。ボールドウィンの不安定さは収まることがなく，コルシカでも自殺未遂が繰り返される。滞在からひと月ほどたって，アーノルドが別離を切り出したのである。その寂しさからある晩，ボールドウィンは入水自殺を考える（Leeming 131–32）。自ら踏みとどまったものの，作家としての成功とは裏腹に，精神の安定を得ることは容易ではなかったのである。

いろいろと事情はあったのだろうが，ボールドウィンはまた帰国を決意する。計画の時点でボールドウィンがはっきりと理解していたかどうかはわからないが，結果として今回は，それまでの帰国とは性質の異なるものとなった。当時のアメリカ社会における地殻変動が，ボールドウィンの生活にそのような大きな変化をもたらすのである。公民権運動に深く関与していくこととなる，ボールドウィンの人生のまた新たな章が，始まろうとしていた。

Notes

1） ハーレムのバーで出会う年配の女性について，“I wondered what she’d be like in bed; then I realized that I was a little excited by her”との記述があるが，それはあくまでのピーターの想像の上でのことである（100）。後年のボールドウィン文学が主題化していく性の実践という観点からみると，本短編はセクシュアリティの探求に乏しいと言いうる。
2） ホエティスは，両親のギリシア系の出自を引き継ぐためにジョージ・ソロモス（George Solomos）という名を改名したという（Campbell 54）。
3） ボールドウィンとライトの関係についてはキャンベルに詳しい（62–70）。
4） ボールドウィンは晩年まで囚人の問題に関心を持ち続けた（Leeming 359）。

参考文献

Baldwin, James. *Collected Essays*. Library of America, 1998.

———. *Going to Meet the Man*. 1965. Vintage, 1995.

Campbell, James. *Talking at the Gates: A Life of James Baldwin*. Viking, 1991.

Eckman, Fern Marja. *The Furious Passage of James Baldwin*. M. Evans, 2014.

Howe, Russell Warren. "A Talk with William Faulkner." *The Reporter*, 22 Mar. 1956, pp. 18–20.

Leeming, David. *James Baldwin: A Biography*. Henry Holt, 1994.

Miller, James. "What Does It Mean to Be an American? The Dialectics of Self-Discovery in Baldwin's 'Paris Essays' (1950–1961)." *Journal of American Studies*, vol. 42, no. 1, Apr. 2008, pp. 51–66.

Pavlić, Ed. *Who Can Afford to Improvise?: James Baldwin and Black Music, the Lyric and the Listeners*. Fordham UP, 2016.